

メールレター(48)

新しい年

明けましておめでとうございます。今年も宜しくお願いいたします。

水無し、土なしのシリコンで固めたい球根の中からすーっと伸びたアマリリスの花が、新年を祝うかのように大晦日に一斉に開花しました。真っ赤な花がぽっかりと宙に浮き、夢を見るようです。

友達のメールに柚子の写真が添付されてきたのは年末のある日のことです。お風呂に入れたけれどあまり可愛いから、そう言葉が添えてありました。この柚子は、母との思い出を彷彿とさせてくれました。まるでプーストの小説の「失われた時を求めて」に出てくる紅茶につけたマドレーヌのように過ぎた日のフラッシュバックです。

ドリトル先生が日本に来るようになった頃のことです。冬至の柚子湯から出るなり、マダム田中に

「君のところはレモンと風呂に入るのか？」

「日本の習慣だから」

菖蒲湯の頃は

「君のところは、草と風呂に入るのか？」

「日本の習慣だから」

母に話すと、

「あーそうかい」

その度にそう言って、くすっと笑うと、そのまま習わしは続くのでした。ドリトル先生には、お風呂だけでも、真っ赤に茹で上がったロブスターのようになる異国の習慣ですが、プカプカ浮かぶレモンだの草だのにはいささか肝をつぶしたようでした。母はドリトル先生の驚きなどどうでも良いらしく、習わしは変えることはなかったようです。

2020年のクリスマスは、珍しく雪のない、ホワイトでないクリスマスになりました。前日から気温が高くなり、クリスマスの日には雨が降り、雪はすっかり溶けてなくなってしまいました。なんだかピュアな気持ちになれそうもありません。

クリスマスイブの日は、マダム田中は大忙し。コロナで誰も来なくても、せめてドリトル先生と二人で楽しいイブのひと時をと頭をひねっていました。テーブルクロスは赤にして、そうそう、グラスも少し華やかな物を、と食器棚(繋ぎ目以外はガラス製)から取り出したその瞬間、棚になっているグラスがずれて崩れ落ちたのです。それも2段目から4段目まで中に入れてあったグラスごとに、ガラガラ〜っと滑り落ち、大切なシャンペングラスもカクテルグラスも、ワイングラスもワンショットグラスも、あー雪崩のように落ちていく、粉々に壊れていく。以前

から息を止めてドアを開けて出すほど、気をつかっていたのに、一瞬の気の迷いなのか、ズルをしたのか、グラスをだす時にぐらっとガラスの板が揺れてバランスがくずれたようです。

「キャ～助けて」

しばらくしやっとやってきたドリトル先生が見たのは、崩れ落ち粉々になったグラスのかけらのなかで必至でガラスの棚のを抑える、泣くに泣けない、絶望したマダム田中の姿でした。少なくとも40個のシャンペングラスやワイングラス、カクテルグラス、ワンショットグラスなどありとあらゆるグラスが一瞬にして粉々になってしまったのです。

「罪の意識感じる？」

「全然。前からグラグラしていて、グラス出すのに息もできなかつたし、何時かこうなるかなあと思っていたし。でも、なんでこのイブの日に。」

と、強がりを言っても後悔の念に襲われます。残ったグラスは取り出したばかりの二つのワイングラスと二つのシャンペングラスのみです。絶望感にとられながらこわれたガラスの破片をかたずけるのに3時間、ドリトル先生が気を取り直して、棚の修理をするのに3時間。

「抹茶茶碗を幾つか持って来て。飾るから」

「こんな物で良いかしら。」

奥に突っ込んで陽の目を見なかった抹茶茶碗を10個ほどマダム田中は取り出してきました。

「そんなに沢山隠していたのか、君は？」

綺麗に飾りつけると食器棚はみちがえるようになりました。ドリトル先生の美観は大したものです。

老夫婦のみのクリスマスイブは盛り上がりにかけますが、シャンペンをあけ、お祝いです。無事に一年がどうにか過ぎてきました。子供達から次々に

「メリークリスマス！」

とテレビ電話がかかり、オンラインクリスマスになりました。便利な世の中になりました。子供達に

「グラスを全部破ってしまってレセプションができなくなりそう。」

と嘆くと、長男は、

「自分たちの分は持っていくよ」と笑い、次男は

「ワーオ、思いきったね。飾り変える良いチャンスかも」

と極めてポジティブ。娘は

「じゃー直ぐオンラインで注文しよう。」

と極めて現代的。三人三様の答えです。3人とも驚きながらも笑いこけ、ドリトル先生も壊れたガラスの山と絶望して佇むマダム田中の姿の説明に笑いこけているのでした。新年はガラスの調達に追われそうです。

新年が良い年でありますようお祈りしております。

